

＊ ＊ 1839年にベーゼンドルファーは神聖ローマ帝国皇帝・オーストリア国王から、“皇帝兼国王宮廷のピアノ御用達者”の称号を受けた。これはオーストリアのピアノ製作者として初めての出来事で大きな栄誉であるとされた。

まず、この特殊なベーゼンドルファーにて、フォルテピアノリサイタルを開いて下さるピアニストの川口成彦氏、この企画を支援して下さいる千葉県文化振興財団と千葉市文化振興財団、そして、貴重な場所を提供して下さいる日本キリスト教団千葉教会に厚く御礼申し上げます。

日一壘のベーゼンドルファー社をはじめ、ナトリピアノ社の名取孝浩氏、ピアノ工房クラングの伊藤繁樹氏からは、折々に適切なご助言・助力を頂き、今日、伸和ピアノ社の全面的なご支援により、同社の技術力と“ピアノ心”を以て、完璧な修復・再生が完了しました。今までお力添え下さり、応援して下さい、ここに挙げきれない大勢の方々に、心より御礼申し上げますと共に、この成果を、これからの様々な機会に、音楽愛好家の皆様が楽しんで下さることを期待致します。



Episodes:
Memorable Two Viennese Fortepianos
as Refurbished in Japan

ノのフォルテピアノ、王室逃れのベーゼント
苦難の旅と幸せな今

小林 定喜 (Sadayoshi)

ルファール フォルテピアノ

私は、今から40年程前に、ウィーンの国連機関に勤めておりました。私のオフィスは、ウィーンを中心街を取り囲む、通称リング(環)通りに面していて、すぐ傍に「オペラ座」、通りの向かいには「ニューイヤーコンサート」でお馴染みの「楽友会館コンサートホール」、反対側の裏手には「国立ウィーン音楽学校(Hochschule, 音大)」がある、という具合で、赴任当初は単身であったこともあり、仕事を済ませた後の夕刻は、音楽浸りの日々でした。

※フォルテピアノとは、18世紀から19世紀前半に制作されたピアノの呼称で、20世紀以降に制作された近代のモダンピアノと区別して扱う時に用いる慣用語である。





Karl Rind

2番目のフォルテピアノは、ウィーン音大のクラス演奏会(KlassAbend)に頻繁に出かけて、若い音楽家達の演奏を楽しんでいた折に、偶々、“古いベーゼンドルファー・グランドピアノ譲ります”との張紙を見つけ、それが契機になって入手した“ベーゼンドルファー 王室逃え”です。



ベーゼンドルファー フォルテピアノ(付記2参照)

この古いベーゼンドルファーは、第2次世界大戦終戦後の(米英仏ソ4カ国共同統治下の)混乱期に、ウィーン郊外の館(Shloss、やかた、宮殿)から持ち出された品で、外装は製造当時のままであるが、メカニックは、ベーゼンドルファー社が、新しく(エラール方式)にしてあること;王室に納められた特別なピアノであることが鍵盤蓋(銘板)に示されていること;ピアノの縁回りなど、木材の境目に埋め込まれている金属角棒は全て銀であること;などを持ち主の男性から説明されました。

これらの説明を聞き、実物を見分してから室外に出た時に、一つ“びっくり驚き”がありました。アップライトピアノが1台廊下に置かれていて、それがモーツアルト彫像付きであることに気が付いたのです。それはまさに、私のフォルテピアノ Karl Rind そのもので、違いは、“きれいでピカピカ”であったこと。私の関心に気付いた持ち主の男性は、「これも一緒にどうですか?」としきりに勧めてくれましたが、さすがにそれは受け取れませんでした。(後悔先に立たず。)それにしても、この大小2台の、曰くありげなピアノと一緒に存在していることに不思議な感じを受けました。(Karl Rindは、ウィーンの小さなピアノメーカーで、存在したのはごく短期間、少数の製品しか現存しないとのことでした。)

さてこの“Karl Rind”と“ベーゼンドルファー王室逃え”は、1978年に、私の帰国と共に日本に到来しました。それからのこの2台のピアノの運命は、楽器にとっては極めて厳しい環境(湿度の高い土蔵の中、日光が直射するピアノ販売店の展示場など)に置かれ続け、惨憺たるものでした。2012年のある日、偶然に、私と家内が“伸和ピアノ社”の社屋の傍を通りかかり、意を決して、その門を叩いた時までは…。

その後のことはご想像の通りです。丁寧に、綿密に同社の専門家・技術者の診察を受け、特別な専門家諸氏のご助言の下に、適切な処置・修理修復、そして更なる向上への施術を、ゆっくりと、丁寧に施していただき、2台共に、今の“幸せな”“健康で、よく歌う”楽器本来の姿になってきています。この手当の過程を脇から観ておりますと、担当の技術者のみならず、同社社員全員が、単なる仕事としての取り組みを超えて、ピアノという楽器への“ふんわか”とした愛情を注いでおられることが感じられます。

ベーゼンドルファー(リスト)とKarl Rind(モーツアルト)が、ここ日本で、再び一緒になって、ピアノ音楽愛好家の耳と目を楽しませている…。“幸せそのもの”と言えましょう。

付記:

1. このベゼンドルファー・フォルテピアノは、元々は、オーストリア帝国・王国の皇帝兼国王(Kaiser und König, Emperor and King)であった、フランツ・ヨーゼフ一世(1848-1918)の息子ルドルフ皇太子(Kronprinz Rudolf)が住んでいた、ウィーン郊外のマイヤーリングの“狩りの館”(Jagt Schloss)にあったと聞いています。

真偽のほどは判りませんが、ベーゼンドルファーが、皇帝国王の宮廷御用達の認可を受けた時期(1839年)と、このピアノの銘板に描かれている紋章の形状、などを勘案すると、製作されたのは、“1839年”に近い時期と推定されます。(裏表紙の年表を参照)

2. オーストリアは、他に例を見ない数奇な運命を辿ってきた国です。歴史上、周辺の諸国をまとめた“帝国”であると同時にオーストリア本国の“王国”であった時期があり、その時の君主は、“皇帝Kaiser,Emperor”であると同時に“国王König,King”でした。

本件のベーゼンドルファーピアノの銘板には、ハプスブルグ王朝の紋章(双頭の鷲)に加えて、このピアノが“皇帝”であり同時に“国王”である君主の館(Hof)に収められることを示す、“Kaiser und König Hof”の文字が装飾文字で大きく書かれています。これは、ベーゼンドルファーピアノとしては極めて珍しい事例で、私が諸国、諸市の楽器博物館を探勝探索してきた限りでは、他に例がありません。このピアノの楽器としての評価は別として、この銘板は、このピアノの歴史的な意義を示唆していると思われます。